

ファイブスター投信投資顧問

「MASAMITSU データセクション・ビッグデータ・ファンド」運用開始2年 前編

システム改良を重ねて今年に入って本格機能

大木昌光取締役運用部長兼チーフ・ポートフォリオ・マネジャーに聞く

将棋や囲碁で人間がAI（人工知能）に勝てなくなりつつある中で、資産運用の世界でもAIを活用したファンドの投入が相次いでいる。ファイブスター投信投資顧問は、日本株公募投信「MASAMITSU データセクション・ビッグデータ・ファンド」を2015年8月20日より運用を開始している。ビッグデータ分析によって運用するファンドは日本の公募投信で初めて。日本の公募投信でビッグデータやAIを活用したファンドの先駆的である。運用開始してまもなく2年を迎えようとしている。同ファンドのポイントやこれまでの運用状況、さらにAIファンド一般の将来性や有効性などについてどのように考えているのか、同社大木昌光取締役運用部長兼チーフ・ポートフォリオ・マネジャーに聞いた。



AI活用で今後のあるべき運用の方向性を先取る

■ファンドの基本ポイント

ツイッターやフェイスブックなどのソーシャルメディアから世の中で注目されている事象や、人気の商品などいろいろな情報を集めてきて、それによって新しくトレンドとなったり、テーマとなったりしそうなものをいち早くつかんで、そのトレンドやテーマにかかわる企業をもれなくピックアップして、そこからリターンを得ようとするのが、当ファンドのスタートポイントである。

「ソーシャルデータに基づくシステム」と同時にもう一つ走らせてきたのが「マクロデータに基づくシステム」。株価が今後上がる可能性が高いか下がる可能性が高いかを個別銘柄で分析していく。これはファンダメンタルという部分もあるが、それよりは、過去のいろいろな企業の株価をその当時の為替や金利などの動きと相関で見ながら、ディープランニングの手法を用いて、例えば、A株の現在の状況が、過去に上昇してきた時と似たような状況にあることがピックアップされると、これは買った方がよいとなるように出てくる。つまり株価をAI的に分析し、そこで株価の上昇・下落を予測していくということになる。当ファンドでは、ソーシャルデータを利用した方法と、マクロデータに基づくAI的なアプローチの両方を持ちながらやってきた。

■ほかのファンドとの違い

ほかのファンドとの違いは、ソーシャルデータの利用だけでやっている運用会社や、AIを用いて

やっている運用会社があるが、ソーシャルデータとAI両方を見ながらポートフォリオを構築しているのは当ファンドだけではないかと考えている。その結果、当ファンドは良いデータ、悪いデータともに活用しようというコンセプトの下で、カラ売りも当然できる形となっているが、カラ売りに関してしっかりと個別銘柄を抽出できているファンドもないのではないかと。2本柱で運用していくということが当ファンドのコンセプトである。

■運用開始当初と現在

実際の運用を見ると、AIは当初、機能しない部分があった。ファンドがスタートしたのは15年8月だが、この時にチャイナショックが起きて、ここから株価が大幅に変動して、この状況は昨年6月のBREXIT（英国EU＝欧州連合＝離脱）の時まで続いた。過去の分析に基づく動きとは、ちょっと違う動きをすることもあって、当初は苦戦する場面が見られた。昨年の中盤まではソーシャルデータを中心とした銘柄抽出を主にやっていた。ただし、徐々にマーケットが落ち着いてきたことも一つだが、内部でAIのシステムをブラッシュアップして、逐次、いろいろ改良を重ねてきた結果、今年に入ってこれがうまく機能するようになってきている。買いとカラ売りが結構いいタイミングでピックアップできる。現在はAIによる運用の方が中心となっている。

■AI運用の優位性

AIによる運用の優れているの

は、例えば、テクニカル分析ではいろいろなチャートを見ながら人間の目で見つけられるパターンとか類似点を見つけてきて上昇・下落を予想しているが、AIの場合、過去の似たような時と同じようなことが、現在起きていることを人間の目線より、格段に多くのものを短時間に抽出してくる。人間の目で認識できるかどうかというレベルではなくて、過去の相関を相当幅広く見つけてくることになる。現在のAIは、運用の方法にもよるが、できるだけ多くの買いやカラ売りの候補をピックアップしてくると、確率論だが、当然ながら間違えるものも入ってくる。その時に、買いの方に50銘柄とか、カラ売りに50銘柄となってくると、例えば、勝率が6、7割であっても相当なりターンにつながってくると考えられる。

そういう意味で、これは人間が探せば、徹夜しても見つけ出すことができないものを機械が一晩で毎日毎日見つけてくるということであり、これは最近、将棋や碁で勝てなくなったといわれるが、運用する際の元ネタとしての投資候補を選んでくるプロセスを考えると、既に人間の能力を超えてきていると感じている。運用は、ファンダメンタルで行う場合でも、チャートでやる場合であっても、結局、どれだけ多くの候補を集めてきて、その中から精度の高いものを選んでくるのかだと考える。チャートを見る人も、すべてのチャートを見切れるわけではない。ファンダメンタルを見ている人でも限界がある。運用の方向性として、今後のあるべき運用の先取りしている方向性ではないか。

（後編は21日付に掲載）